

# 『この街で生きてゆく』

田原市浦町 中城 学

陸の孤島と呼ばれる小さな街で目を覚ます。

朝日に照らされて輝く無限のキャベツ。

風に揺らめき香る菜の花。

瑞々しさをいっばいに含んだ朝の空気。

美しいそれらを懸命に吸い込み僕は走る。

金属の怒号に、唸る機械の起動音。

汗と油にまみれて身体を動かす。

決められた動作をひたすらに繰り返す。

電気の変わりに食べ物で動く。

僕は車の部品を造る機械の一部。

「僕の替わりなんて掃いて捨てる程いるのに」

そんなことを思う、時もあるけれど。

でも大丈夫。僕はもう、大丈夫。

きつかけは、ある日の帰り道。

道を譲ってくれた一台の車。

中には父と母、そして娘が二人。

僕には懐かしい、あたたかな家族。

頭を下げて通り過ぎる時、僕は見た。

屈託なく笑い合う、二人の少女を。

繰り返すだけの単調な僕の毎日は、

確かに誰かの今日を笑顔にしている。

そんな小さな誇りが、命に火を焚べる。

一日の仕事を終えて、僕は歩く。

安らぎと涼しさを運んでくれる空気。

風が落ち着き、休む菜の花。

夕日に照らされ赤く染まる無限のキャベツ。

陸の孤島と呼ばれる小さな街で僕は眠る。

明日も、この街で、生きてゆく。